

南方（ニューブリテン）

ニューブリテン島の生き残り

島根県 椿 省 三

私は兄が出征してしまいましたので、生家で農業を手伝っていました。昭和十七（一九四二）年十二月現役兵として野砲第三十九連隊要員として広島野砲連隊へ入隊。一週間後宇品港を出港し釜山、漢口を経由し中支鏡家河で連隊の第九中隊に編入されました。ここで約二カ月現地訓練と初年兵教育が行われました。私達年次の初年兵は遂に終戦まで初年兵を迎えることなく終わった惨めな軍隊生活に終始しました。

教育訓練終了後、官塘墟の警備につきましたが、私

の中隊は第三十九連隊から師団も異なる第二十三連隊に転属することとなり、徐州に移動し、さらに南方転出のため呉淞港より乗船することとなりました。

私達の第三次輸送船団は「清澄丸」「護国丸」で、いずれも海軍の操船する輸送船です。護衛船として巡洋艦「五十鈴」、駆逐艦「磯風」に守られ、大隊本部、第七、八、九中隊が「清澄丸」に乗船、一路トラック島に向け出港しました。

私達より二日前に出港した第二次船団の「栗田丸」（第二十三連隊本部、第六中隊、衛生隊乗船）は南シナ海航行中に敵潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没し、僅か数人の生存者を残すほか、全員が海没する悲惨な南方進出の渡航でした。この海没将兵の中に私の郷里出雲市の出身者も数人あり残念至極でした。こうした状況

下、私等の船団は薄氷を踏むような危険な航海を続け、無事トラック島に到着することが出来ました。

トラック島の海軍の連合艦隊基地は、当時戦艦「陸奥」「長門」をはじめ大小五〇―六〇隻の艦艇が集結投錨し、中に戦艦「武蔵」の雄姿を見て全く心強く感じました。昨日までの渡航中の不安等は全く嘘のような気がします。

昭和十八年十一月三日「清澄丸」「護国丸」は出港しました。当日は明治節の良き日にあたり、支給品のパイアを食べている最中「敵襲」の急報。敵重爆撃機コンソリデーテット数機が頭上より爆撃開始。爆風により船は木の葉のように揺れる。その都度船が海底に落ちこむような気持ちでした。爆撃も終わって甲板の上に上って見て驚きました。今まで甲板上に積まれていたドラム缶が爆風で吹き飛ばされ、数人の兵もドラム缶と共に海上に吹き飛ばされ浮き沈みしつつあります。やがて缶は救命艇で救助されましたが船はラバウルに直行すること不可能となり、急にニューアイルランド島カビエンに上陸することとなりました。

ここに約二十日ほど滞在、駐留することとなりましたが我々段列は第九中隊主力と離れ、大隊本部の直轄としてラバウルに向かうこととなり、貨物船に乗船し、途中空襲等もなく無事ラバウルに到着することが出来ました。

上陸時ラバウルは連日敵機の来襲が続きましたが、当時はまだラバウル航空隊は健在で、敵機に対して激しい反撃を繰り返し、空中戦が続けられていましたので、我々も心強く意気も軒昂たるものでした。

この頃、敵の機動部隊は島のマーカス岬に上陸して来ました。このため我々は島の北岸の南よりあるイボキに進出することになりましたが、ニューブリテン島の北岸の道路は湿地や密林を縫う名ばかりの徒歩道で、将兵は連日のスクールに叩かれながら泥沼のような悪路を疲労と飢餓に耐えて行軍しなければ方途がなかったのです。

イボキに到着後、敵の空襲を警戒しながら資材、糧秣の揚陸作業を実施中、大隊本部と第七、八中隊は島

の西端に上陸した敵を撃退すべく命を受け、ツルブ、ナタモ方面に向かって進撃することとなりました。

敵海兵第一師団はツルブに、一部を以ってナタモに上陸、同地区は警備していた我軍の第十七師団は戦車を主力とした敵の優勢な攻撃により逐次後退を余儀なくされ、ツルブ飛行場地区に圧迫され、同地区を警備していた第十七師団歩兵第五十三連隊も壊滅的打撃を受けつつありました。この時期、ツルブ地区から遠く離れた島の中部タラセアにおいて我が第九中隊主力も敵と激突し、六名の戦死者が出ていました。ラバウルからの海空の支援は意の如くならず、前線の弾薬、糧秣も底をつき如何とも成すべき方策も尽き果て、「ツルブ」を放棄しラバウルに撤退命令が下りました。

海岸沿いの道路は比較的行軍が容易でしたが敵機の空襲に曝され易く、海上からの妨害もあり、ために海岸道を放棄して密林を啓開、前進せねばならぬこととなりました。昼間とて暗いジャングルを彷徨する部隊を敵機は間断なく掃射を続けます。口中でも太陽の光を拝むのは稀で、被服は汗まみれで濡れ通し、乾かす

暇も気力も無く、宿営といっても雨のジャングルの湿地で、山に生い茂るしょうがの葉を集めて小舎を作り、携帯天幕を広げる程度が精いっぱい宿舎です。安眠等出来る筈がありません。飯盒炊さんも敵機に発見されないように細心の注意を払いながら、米は残り少なくなり現地の薯か雑草で腹を満たして飢えをしのぎました。現地人は長い行程の間一人として発見しませんでした。泥の中の行軍に軍靴は破れ、素足でただひたすらラバウルヘラバウルへと六十日間に及ぶ敗退の途が続きました。

この敗退の間、朝の出発時に身体の不調を訴え、前夜の仮眠の小屋に残留して遂に不帰の人となった戦友、昼間、谷川に水汲みに降りて水辺に倒れ、谷から這い登れなかった戦友のことなど、戦後五十年経過した今日までも眼底に浮かび、そのご冥福を祈らざるを得ません。こうした困苦の末、中隊は再びラバウルに集まって、椰子林を開墾し、薯を植え、自活が始まりました。

終戦となり豪州軍の支配下となりました。豪軍の

我々に対する扱いは比較的良好であって使役はほとんど海岸での荷役作業でした。終戦と同時に直ちに内地に帰還するものと思ひ備蓄してあつた糧秣を一時放出して米食をしましたが、帰還が容易でないことが判り、元の薯食に復し、再び現地自活が続きました。

日本内地と違って気温は絶えず二十五度くらいはあつて、薯も野菜も年数回栽培が出来るので大いに助かりました。

昭和二十一年五月、名古屋港に復員し、再び帰ることのないと覚悟して出た我が家へ帰り、家族との再会が出来ました。思ひ出の大陸、ラバウルに決別し、既に五十数年が経つて、当時の記憶も忘却の彼方に消えつつありますが、ただ戦争など再度起こつてはならないと祈願し、永遠の平和を子や孫に語り継ぐことを念願しています。

終戦で復員後、伯父の家に養子縁組みし、農家を継ぎ、妻には早死にされましたが、娘夫婦に囲まれて幸せな老後を楽しみながら生活しています。

父と慕う小森中佐を憶う

岐阜県 小林 仁 平

小森政光中佐は、近衛第二連隊第一大隊長で、私は大隊長の伝令を務めていたが、昭和十九（一九四四）年四月九日、ニューブリテン島で壮烈な戦死をとげられたことを知ったので、大隊長と伝令たる私、上官と部下の関係、ならびに小森支隊長の最期について申し述べる。

私は、東部第三部隊第一大隊の兵である。小森大隊長の伝令を一年間務めた夏のことである。第三中隊の三年兵は富士登山が出来るとのことで、大隊長殿の許可も頂いていた。

大隊長殿から「小林！ 私に動員令が来た。近衛師団で一人ということじゃが、どうしたことじゃろう」と、言われた。戦争は厳しくなっている。私は、富士登山を止めて、一週間準備に専念した。第一に、大本